

岩瀬文庫本『一本菊』の特質

伊藤千世

一

兵衛佐に侍りける時、薩摩の国に移されけるに、伊予の港といふ所にて都鳥を見てよみ侍りける

あだ波の中の関白

中世小説の「一本菊」は、その流れをたどると、「風葉和歌集」所載の散佚物語「あだ波」にさかのほることができ。この理由として第一に、「風葉和歌集」所載の巻第五秋下に、

みこにおはしましける時、菊の宴せさせ給ふに、前中宮いまだ里におはしましける御前の菊、関白に召されければ、一本奉れりける後にさし置かせ給へりける

あだ波の院の御歌

315 我が心君がまがきに移ろふはなほや残れる白菊の花
また、巻第八羈旅に、

586 都鳥恋しき方の名にはあれど我が古里の言づてもなし

とある二首が、多少の字句の異同はあるけれども「一本菊」と共通している点や、詞書さと物語の流れの類似性が挙げられる。また、「一本菊」の中の和歌に、

身をすて、みるめかりにそあななみのうらにてふねといそきつるかな

あななみのうらにいかなるちきりしてみをすて、のみみるめかるらん

と傍線部で示したように、「あだ波」という言葉のある点から、「一本菊」は「あだ波」が、改作されたものではな

いかと推定されているのである。

また、この「二本菊」には伝本が非常に多く、松本隆信氏^⑧によって、

A (一)慶応・〔室町末江戸初間〕写本 大一冊

△影印室物二▽

(二)天理・〔室町末江戸初間〕写本 大一冊

(三)大洲市立・〔室町末江戸初間〕写本 大一冊

△芸文研究28▽

(四)〔万治3年西田勝兵衛尉刊絵入大本三巻〕(赤木)

△室物三▽

同右野田庄右衛門後印本(国会・東大霞亭・筑波大・広島大国文・実践女子大)△近世文芸叢書三▽△室物三解題

(ロ)寛文11年松会刊絵入大本三巻(天理) △

同右松会後印本(刊年を削る)△彰考館・東北大狩野 △

同右西村後印本(大東急・内閣・国会・京大) △

△

(イ)竜門・写本 大一冊

(二)岡山大池田・享保11年写本三巻 大一冊

(五)刈谷・写本 半一冊

(六)岩瀬・奈良絵本 横三冊

△室物三解題

(七)天理・写本 特大一冊

(八)慶大斯道・奈良絵本 横三冊

(九)徳江元正・奈良絵本中欠 半二帖

B 京大・写本(扉題「白ぎくさうし」) 大一冊 △室物三▽

※小野幸・写本 大一冊

※天理・写本 大一冊

※〔寛永〕刊古活字版大本二巻(小汀旧下欠)

△古活字版之研究

と伝本が分類されており、A類の諸本の相互関係は、横に並立する関係にあると述べられている^⑨。この他に、内閣文庫蔵写本「墨海山筆」^⑩、上田市立図書館花月文庫蔵刊本一冊、三村義人氏蔵写本(残缺)、大阪青山短期大学蔵卷子本、ニューヨーク公立図書館スパンサー・コレクション蔵奈良絵本三冊^⑪、パリ国立図書館スミスルズエフ・コレクション蔵奈良絵本三冊(上册前半欠)、及び「奈良絵本絵巻集五巻」に収載の半紙本列帖装三冊の奈良絵本、同本十一巻収載の大型卷子装上中下三巻の絵巻や横本袋綴装上中下三冊の奈良絵本等がある。ところで、この「二本菊」の伝本の多さは、人々に好まれてきた物語の証拠であり、諸本間の入り組んだ関係をもちつつも言葉の取捨選択には、物語を広める側の趣向性が反映されているのではないかと思われる。

さしあたって、ここでは、私の居住地の愛知県にある閲覧に便利な岩瀬文庫本の『一本菊』をみていきたいと思う。そこで、A類第一種の書写年代の古い慶応本^①、第二種の流布本系統の国会本（万治三年版^②）、B類の京大本と比較しながら、岩瀬文庫本の編集者の趣向性や特質を考察していくことにする。

なお、物語の粗筋を紹介しておくことにする。^③

村上帝の御時、京三条高倉の右大臣は一男一女があり、男子は殿上して兵衛佐となっていた。妻が死に、右大臣はあらたに後妻を迎え、さらに一男一女をもうけた。この男子も殿上して四位少将となった。右大臣の死後、四位少将が家を継いだ。ある年、皇子の兵部卿宮が菊の宴を催し、兵衛佐の家にある美しい一本菊を召した。父右大臣が鞍馬から求めてきた菊で、妹姫が培養していたものであった。以来、宮は姫のもとへ通うようになる。継母はこれを聞いて妬み奸計をめぐらす。四位少将は無芸無才にしておごれる人物であったので殿上人たちに憎まれ、五節の夜に闇討ちに遭った。継母はこれを兵衛佐の仕業と譏奏したため、兵衛佐は鬼界島に流され、妹姫は四条辺りの家に閉じこめられた。兵衛佐と契っていた京極大納言の娘の侍従内侍は悲しみに打ちしおれていたが、継母はこれを四位少将の嫁に

せんとした。内侍は逃げのび、薩摩に下って兵衛佐と再会の喜びにひたった。妹姫は継母の家の目代に言いよられて苦しんでいた。姫の乳母が清水観音に詣でて念じている時、長谷寺参詣の帰途の兵部卿宮に行き会い、姫は宮によって救われ、その妃となった。若君が誕生し、宮は踐祚あつて天皇となった。兵衛佐と内侍は都に召し還され、継母とその子供たちは罪せられて都の外に追いやられた。兵衛佐は三位中将から関白へと昇進し、一族には子孫多く生まれ繁栄した。

二

まず、前掲四本（A系統の慶応本・国会本・岩瀬本、B系統の京大本）の物語に関係する部分の、和歌の異同とその数値的な点からその特質を見ていくことにする。

資料1 「和歌の異同」

注 a 慶応本 b 国会本 c 岩瀬本 d 京大本

番号	和歌	場面	詠者
1 a	わかこ、ろきみかまかきにう つろふはなをやのこれるしら きくのはな	見ぬ恋	兵部卿の宮
b	わかこ、ろきみかまかきにう		

3 a		c			2 a		d		c	
b		d	c	b			d	c		
くれないなるのすへつむ花やわれ ならんふみかへさる、身こそ もなりけり	見ぬ恋	ゆきかへるあとそしらしなあ ふさかのせきのみやゐをたつ ねても見よ	(ナシ)	まほしけれ	まほしけれ	見ぬ恋	きくのはな	わか心君かまかきとうつろふ やなおやまたあり白きくの花 わかこ、ろきみかまかきにう つりつ、やとらむかたもしら きくのはな	つろふはなをやのこせるしら きくのはな	
	兵部卿の 宮				兵部卿の 宮					

5 a		c			4 a		d		c	
b		d	c	b			d	c		
あかぬ夜をあけぬとつくるあ かつきの八こゑのとりのうら (ナシ)	後朝	おほつかなたそかれとぎの夕 くれにうわのそらにもいてに けるかな	おほつかなたそかれとぎの夕 くれにうわのそらにもいてに けるかな	おほつかなたそかれとぎの夕 月夜のうはの空にもいてにけ るかな	にけりかな	見ぬ恋	りけり	くれないなるのすへつむ花や我な らんふみかへさる、身ともな りけん	くれないなるのすゑつむ花やわれ ならむ文かへさる、身ともな りけん	つらけれ
兵部卿の 宮					兵部卿の 宮					

c			b			7 a	d			c			6 a			d			c											
しとは			思ひきやかけをならいしみや の夜のくもゐの月とかへるへ			しとは	おもひきやかけならへつるふ ゆのよのくもゐの月にはなる			へしとは			おもひきやかけならへつる冬 の夜の雲ゐの月にわかるへし			とは			ねのこゑ			かつきはなをうらめしき鳥か			したひも、とけぬちきりのあ			めしきかな		
						別離										後朝														
						中将										宮			兵部卿の											

b			9 a			d			c			b			8 a			d																										
りく			いまはとてさしてわかれぬ君 が門つけのおくしにつけよ			よおりく			みかかとつけのおくしにつけ			いまはとてさしてわかれぬき			しほらむ			ちきりおきしくもいの月を見 るたひに君かかたみにそてや			物とは			しらすりしけにもろともに見 し月をくもるとかけのたゑん			のかは			しらすりつけにもろともに見 し月の雲ゐにかけのたえんも ものとは			しらすりつけにも、もり殿は			し月のくもゐにかけのたへん			とは			おもひきやかけならへたるい け水の雲ゐの月にわかるへし		
																		別離																										
																					兵衛佐			兵衛佐																				

b	11 a	d	c	b	10 a	d
あけはなれ山のはちかく入ぬ あけの月	かけはなれやまのはちかくなりぬともめぐりてあはんあり	かてわきなん	ころせはつけのおくしもい	もろともにむすほふれたる	てもせめ	わかれてはつけのおくしもなにかせん我こそこのちのことつ
	別離				別離	
宮	兵部卿の				侍	侍従の内

13 a	d	c	b	12 a	d	c
ちころも又たちかへることそ	かた／＼にぬきてしものをふ	はつへき	む身のなとかはやみにまよひ	かけきよき月のひかりをたの	なん	はに入なはいつかめぐりあひ
別離				別離		
兵衛佐				兵衛佐		

14				15		
d	c	b	a	d	c	b
おしそおもふ	わかれしやさもなれころもし ほたれてかわらぬそてのいろ	らむ	君こふるなみのうみにしつみ なはこん世のあまとなりて返	かなしき	かた／＼にぬきてしものを藤 ころもまたたちかへる事そか なしき	かた／＼にぬきてしものを藤 ころもまたたちかへる事そか なしき
手紙						
兵衛佐						

16				15		
c	b	a	d	c	b	a
ではなし	都とり恋しきかたのなにはあ れとわれかこきやうのことつ てもなし	みやことり恋しきかたの名は あれとわかふるさとのことつ つてもなし	みやことりこいしきかたのな にあれとわかふるさとのこと つてもなし	りそへぬる	まなきにうらみのそてをしほ わかれしをしたふなみたのひ にしつみぬ	らんとてわれもなみたのうみ にしつみぬ
望郷				手紙		
兵衛佐				侍 侍従の内		

19	18			17					
a	d	c	b	a	d	c	b	a	d
我あらはなをたちかへるはる	(ナシ) かなしき	やうきひのことつてしけんむ かしよりいきてわかる、我そ	そかなしき やうきひのをくれてしけんむ かしよりいきてわかる、われ	やうきひのことつてしけんむ かしよりいきてわかる、われ	(ナシ)	なりけり	うきと又なをさしそへてかな しきはたえすつれなきいのち	なりけり うきに又なをさしそへてかな しきはたえすつれなきいのち	(ナシ) ちなりけり うきに又なをさしそへてかな しきはたえすつれなきいのち
別離	訪問 内侍を 侍従の の宮が			兵部卿 の宮が	妹君失 踪				
a b dは	卿の宮			cは兵部 従の内侍	兵衛佐の 妹君				

21	20							
a	d	c	b	a	d	c	b	
身ですて、みるめかりにそあ たなみのうらにてふねといそ きつるかな	そ	春霞たちはなれなはいかはか りしたひはつへき花のなこり	(ナシ)	ふへき	はるかすみたちはなれなは雲 にある月にいつかはめぐりあ	りとも	すみつれなく見ゆるくもひな 時をえてまた立かへれはるか すみつれなく見ゆるくもひな	なりしを われあらは又たちかへれはる かすみうらみはおもふくもぬ なりとも 我あらはなをたちかへれはる かすみうらみとおもふ雲ぬ なりとも かすみうらみにおもふくもぬ なりとも
手紙	別離			命婦				
侍	侍従の内			cは侍従 の内侍				

23 a		22 a		
b	d	c	b	d
<p>たよりにいほまほしきを山 かせのいわまの水にせかれけ るかな</p> <p>たよりにいほまほしさをや まかせの岩まの水にせかれけ</p>	<p>(ナシ)</p> <p>きめかるらん</p>	<p>あたたなみにいかなるあまのち きりして身をすてて、かくう</p>	<p>あたたなみのうらにいかなるち きりして身をすててのみみる めかるらん</p>	<p>(ナシ)</p> <p>ききにけり</p>
再会		手紙		
兵衛佐の 妹君		兵衛佐		

25 a		24 a		
c	b	d	c	d
<p>ふえたけのなきしうきねもわ すられすうれしき事をみるに つけても</p> <p>ふえ竹のなきしうきねもわす られすうれしきふしを見るに つけても</p> <p>くれたけのなきしうきねもわ</p>	<p>(ナシ)</p>	<p>つるかな</p> <p>すしてもらすとのみうらみ</p>	<p>せかれけるいはまの水をしら すしてもらすとのみいのりけ るかな</p>	<p>(ナシ)</p> <p>せかれけるいわまのみつをし らすしてもらすとのみうら みけるかな</p>
再会		再会		
兵衛佐		宮 兵部卿の		

d	c	b	26 a	d
(ナシ)	(ナシ)	をいのらむ	いとふへきうき世のほかはず てはてついまはまことのみち	すられすうれしきふしをみる につけても
卷末記				

表1 「和歌の数値表」

卷末記	命婦	中将	侍従の内侍	兵衛佐	兵衛佐の妹君	兵部卿の宮	総数	慶応本
0	1	1	4	8	2	6	22	
1	1	1	5	8	2	8	26	国会本
0	0	1	4	8	2	6	21	岩瀬本
0	1	1	3	5	0	7	17	京大本

こうしてみると、A系統の諸本においては、和歌中の言葉の異同は諸本間で入り乱れているが、内容的にはあまり差がないようである。しかし、和歌の数は、写書年代が一番古いとされる慶応本よりも、国会本のほうが多く、岩瀬本は、慶応本より一首少ないが同じ配列になっている。これに対して、B系統の京大本は、A系統の諸本と比較して和歌の数が少なく、表1などからも指摘できるように、物語が進むに従い和歌が削られていっている。また、和歌自身にしても、独自の個性をだそうとしているが、どちらかというとな国会本に近い配列になっている。

三

そこで、和歌の出入りに着目して、A系統の慶応本・岩瀬本の両書に存在しない和歌から考察を進めることにする。するとまず、5番（兵部卿の宮が姫君の所から帰る時に詠む和歌）・6番（兵部卿の宮の後朝の手紙の中の和歌）の和歌があげられる。前後の文章を加えてこの場面をみると、慶応本・岩瀬本においては、物語の進行からみてこの二首がないだけでなく、文章も簡単になっており、次の事件の発端へと場面変換が行われている。これに対して、国会本は、この場面を和歌を含めて丁寧に描くことにより、

姫君（兵衛佐の妹君）に対する兵部卿の宮の思いの深さを強調し、物語の滑らかな進行をはかっている。

また京大本は、同じ位置に兵部卿の宮の後朝の和歌を配しつつも、4dで示したように国会本と和歌が異なっている。そして京大本の和歌の前に、

あかぬわかれの、鳥はものかはと、ゑいせし人のこ、
 ろまで、おほしめしあわせて、御なりおしくは、お
 ほせとも、人めつ、ませ給ふ、御身なれば、たちいて
 させ給ふとて

と書かれている点から、『平家物語』の月見の場面の、小侍従の、

待つ宵のふけゆく鐘の声きけばかへるあしたの鳥はも
 のかは

またばこそふけゆく鐘も物ならめあかぬわかれの鳥の
 音ぞうき

という二首が思い浮かべられる。

次に、19番20番の和歌について考えてみることにする。

この場面は、内裏女房である侍従の内侍（兵衛佐の恋人）が、四位の少将と縁づけようとする播磨の三位の企みから逃れるため、宮中から脱出しようとするところである。この和歌の前後の本文異同は、

慶応本	国会本	岩瀬本	京大本
比は三月の、 十日あまり なり、おほ ろ月よ、い かきの、こ かけも、と もにまよひ ゆく、ゆふ くれなれば、 ことに、い と、あはれ にのみみえ しかは、み やうふ、か くそ、なか めける	比は三月の 十日あまり の事なれば。 おぼろ月夜。 花のこずゑ にまよひ。 ことに哀に 見えしかば。 中将みやう ふ	ころは三月 あまりのこ となれはお ほろ月はな のこかけに まよひ行夕 くれはもの 、あはれに て心も身に そはぬこ、 ちして	ころは、や よひ十日あ まりのこと 成に、かす みたなひく、 おほろ月よ に、花の色 かもうつも れて、うす すみのへに、 ことならず、 みやうふの つほねと、 てにてをと りあわせ、 ゑんのはし まで、出た まひ、御な こりも、い まはかりな りと、なみ

(歌19番 a)
と、うちな
かめて

くるまにの
りて、めの
とのもとに、
ゆきつきて、

(歌19番 b)
といへばじ
ぶうのなひ
しかくなん
(歌20番 b)
かやうにう
ちながめて

なくく車
にうちのり
て出す。

(歌19番 c)
とかやうに
うちゑいし
て

なくよりほ
かのことな
くてくるま
にのりてめ
のとのもと
へいてさせ
給ふ

たにむせひ、
のたまへは、
みやうふの
つほね、か
くそゑいし
たまふ

(歌19番 d)
ときこへけ
れは、し、
うのないし、
とりあへず
(歌20番 d)
とうちなか
め、
(一部省略)

くるまにの
り給ひ、め
のとこのも
とへそ、い
そかれける

となつてゐる。つまり、侍従の内侍と命婦が別れを惜しむ
場面において、慶応本・岩瀬本は19番の和歌しかないの
である。そして19番の和歌は、他の諸本では命婦の和歌であ
るのに対して、岩瀬本のみが侍従の内侍の独自歌として配
して含んでいる。ところで、詠み手をかえるとどんな相違
が生まれてくるのであろうか。この和歌の詠み手を命婦と
した場合、「我」にあたるのが宮中に残る命婦で、侍従の
内侍を「春霞」に喩えて、恨みに思うことがあつてもいつ
かまた宮中に戻つていらつしやいという内容になる。これ
に対して、侍従の内侍の詠歌とすると、「我」はこれから
宮中を去つていく彼女自身となり、春霞にまた恨みに思う
ことがあつても戻つていらつしやいという内容になる。こ
の場合、詠み手を侍従の内侍とすると、場面状況から考え
て、恨みを抱いていつ戻ることができるとも分からぬまま
侍従の内侍が去つていく時に、彼女自身が春霞に戻つてく
ることを促すのは、物語の流れの上で不自然である。また、
慶応本のように、副主人公級の侍従の内侍が和歌を詠むこ
となく、脇役の命婦だけに詠ませているのもこれまた不自
然である。故に、19番の和歌は詠み手を命婦としたほうが
自然であり、かつ19番と20番の和歌は、もともと物語中に
贈答歌として存在していたのではないかと思われ
る。

以上の点から、岩瀬本は、伝本の上で、慶応本に近い存在であるといえよう。また、国会本の和歌数の多さは、物語の進行をより滑らかにし、不自然さをなくさせる効果があると指摘できる。さらにいうならば、国会本は、物語の進行上から考えて、本来あつて欲しい場面に和歌が配置されているのに対して、慶応本と岩瀬本は欠落させていることになる。

故に、和歌の配置問題に関しては、流布本系統の国会本の方が、物語の流れから考えて、原型に近かったのではないかと想像することができなくもない。この点について、慶応本と同様の古い写本（慶長期頃の写し）大洲市立図書館矢野玄道文庫蔵本や天理図書館蔵本で調べてみても、5番6番の和歌は存在していない。これに対して、19番20番の和歌は、矢野玄道文庫蔵本・天理図書館蔵本とも、命婦と侍従の内侍の贈答歌として存在している。とすると、元来の和歌の配置は、和歌番号19・20番は、贈答歌として組み込まれていたが、後朝の歌の二首（5・6番）は、後からの増補と考える方が妥当であろうか。

四

では、岩瀬本のみ和歌の減少はどういう事を示すので

あろうか。この部分は、兵部卿の宮から二度目の和歌（2番）が、贈られてきた場面である。この前後の部分の文章をもう少し詳しくみると、他の諸本では、初めに兵部卿の宮の歌が贈られてきた時に、兵衛佐が女房達に姫君（兵衛佐の妹君）に返事を書くことを勧める指示の記述がある。これに対して、岩瀬本はこの記述ごとけづられており、他の諸本では2番の和歌の後にある女房達が妹君に和歌を取り次がないという記述が、一番の和歌の後に続く結果になっている。このことは、岩瀬本が、出会いの部分の簡略化をはかるだけでなく、兵衛佐にとつて、兵部卿の宮と姫君（兵衛佐の妹君）の婚姻関係が、願っていた事実であるという観点を抜かすことになり、姫君の後見人としての兵衛佐の影響力を弱めることになるのではないだろうか。

また、岩瀬本で問題となる和歌に、18番の和歌が挙げられる。この18番の和歌を、前後の文章と合わせて掲出してみると、

慶応本	国会本	岩瀬本	京大本
みや、御らんすれば いなし、申さ れけるは、	宮是を御らんずれば。 ないし申けるは。むか	宮御らんす てないしに とはせ給ふ はむかしも	みや、つく く、と、御 らんして、 これも、す

むかしは、かゝるためし、なければこそ、あにもかきて。とゞむらめ。今して、つたへはんへるらめ、いまは人(ひと)こゝに、かなしきは、こはいか、せんとて

(歌18番 a) と、申はんへれはみや、けふよりは、かやうに、かきてこそ、なくさまん

しもためしなればこそ、あにもかきて。とゞむらめ。今して、つたへはんへるらめ、いまは人(ひと)こゝに、かなしきは、こはいか、せんとて

(歌18番 b) いまよりは。かくてうちなぐさむべかりける。ゆかりの草とおほせあ

かゝるためしもあれはとてかくそあそはしける

(歌18番 c) とうちすさみたまひていまよりはかくこそいうてなくさめ候はんす

へには、わかれをかなしみ、給ひしそかし、いまわれか身に、ひきあてぬれば、なつかしきあなりと、おほせける、なひしも、しのひのなみたを、せきかねて、見へにける

すれは、ゆかりの人そと、おもひ給へと、をほせ、ありければ、

りて

れとてゆかりくざと思ひ給へとおほせありければ

というような文章異同があり、詠み手が、慶応本・国会本では侍従の内侍になつてゐるのに、岩瀬本では兵部卿の宮に変換させてゐる。ところで、この和歌は、楊貴妃と玄宗皇帝の事を思い浮かべて詠んでゐるので、詠み手が侍従の内侍の場合は、和歌の文の「いきてわかる、」人が、彼女の恋人で薩摩方に流された兵衛佐になる。しかし、詠み手が兵部卿の宮の場合は、その対象者が彼の恋人で継母に幽閉されてしまった姫君になつてしまふ。この相違は、侍従の内侍の兵衛佐への思いから、兵部卿の宮の姫君への思いの深さに変換させることにより、読者の姫君に対する人物評価を高くする効果を導きだしてゐる。つまり、これらの和歌異同から岩瀬本は、故意か無意識かは別として、兵衛佐への読者の視点を押さえて、読者の視点を姫君に向けさせる傾向があると考えられる。

五

次に岩瀬本の本文内の特色をみることにする。この本は、A系統の諸本と付かず離れずの関係にあるが、大きな特色として二点上げられる。第一が、次に示す点である。妹君が、兵部卿の宮の母女御に認められ迎えられた以下の部分で、

Aは、女御御らんして御まこのわかみやをいたきたまひていまたもうけのみやもましまさすくきやう天上人せんきありてち、宮をさなくおわせしにはるかにまさり給へ^ひひけりこれをわか宮につけたてまつらんとてやことなき御もてなしともにてあけぬくれぬと返し給ふ
(再会の絵)

Bさてひやうへのすけとのほまつ契りたりしきさきのみやの候し人そまゐり給ひけるなるひやうへのすけとのこそまゐりて候へと申ければきさきいてさせたまひてと記したAとBの部分の間に、

- 1 帝の死
- 2 兵部卿の宮が帝位につく
- 3 妹君は后になり若宮は東宮にたつ
- 4 兵衛佐が召し返される

5 兵衛佐は侍従の内侍と共に帰京

の五項目の要素が他の諸本では加えられている。この部分については、岩瀬本がなんらかの理由で文章を脱落させてしまったか、あるいは岩瀬本系統の祖本がすでに脱落しているのをそのまま写してしまったのであろうか。しかし、ここでは、この部分がないことがこの話にどのような効果を及ぼしているかを考えてみることにする。すると、この省略されている五項目は、もちろん兄の兵衛佐が戻ってくることは妹君にとつてうれしい事実ではあるが、兵衛佐にかかってくる苦難の解除とこれからの恩恵を予感させるものである。故に、岩瀬本において、妹君が認められ母女御に迎えられたという記述の後に再会の絵があり、兵衛佐との再会へと進むのは、作者の視点が妹君に強く向けられているということが指摘できるのではないだろうか。

また、絵図から見ても、岩瀬本の図は20図(最初の図は二面で一図)あり、同じく絵図を持つ国会本の場合には、13図(最後の図は二面で一図)ある。岩瀬本は、奈良絵本であるのだから、絵図の量が、相対的に多いのは理解できる。しかし、国会本は、兵衛佐の苦難を示す流刑地へ向かう絵や流刑地で一人もの思いに沈む兵衛佐の絵が配されているのに、岩瀬本は姫君が閉じ込められている絵や播磨の目代の求婚の絵などが配されている。つまり、兵衛佐を主体と

した絵（兵衛佐の苦難を示す絵）が国会本にはあるのに、岩瀬本ではこの部分は排除されており、そのかわり姫君を主体とした絵（姫君の苦難の部分を描く絵）を取り入れているのである。このことは、絵図の面からも岩瀬本は、どちらかというと妹君に重点を置いていこうとしているのではないかと考えられる。そして、絵図の相違は、視覚的要素から、潜在的に文章の相違よりも強烈な印象を、読者に与えることになろう。

なお、そうであるなら、宮中での闇討ち事件や侍従の内侍との恋愛譚がなぜ省略されていないのかという疑問もでてくる。しかし、そうなると、話の筋をかえてしまうことになり、この物語の持つ特性を損なってしまうため省略されなかったであろう。

次に、第二点として、この物語の終結の仕方が挙げられる。物語的には兵衛佐・妹君及び彼らをめぐる人々の栄華を描くという血筋優位主義的結末で結んでいる。この後の諸本の書き手の感想を比較して見ると、

慶応本	国会本	岩瀬本	京大本
いまもむかしも、かみほとけ御ちかい、いづれもく、おろかと、申せとも、くわんをむの、御ちかひに、すきたることなし、なさけありし人は、ゆくすゑ、かやうに、さかへ給ふへし	むかしも。いまも。ぶつじん三ばうの御ちかひ。おろかならねども。はせのくはんをん。清水のせんじゆくはんをんの。御りやうはうべんにすぎたる事ぞなき。なさけあらん人は。行すゑまで。かやうにさかふべきものなり。	た、くわんおんの御ちかひにすぎたることそなかりけるあらん人はすへてかやうになり給ふへし	

ところを、	しやうちき	よろつの物
かきうつし	しやほうべ	と申つたへ
たる、さう	んたんぜつ	待るなりこ
しなるへし、	むじやうだ	れをみきか
このさうし	うこれなり	ん人くは
御らんせむ	(歌26番d)	わろき心を
人、は、く		うしなひて
わんをんの、		人よかりな
みやうかう、		んとのみお
卅三へん、		もふへし人
ひさうのみ		のためよき
やうかう、		人はわれよ
廿四へん、		しと申しつ
となへ給ふ		たへける
へし		

というようになってゐる。この部分は、京大本には比較で示したように書かれてなく、京大本は、物語部分で終結している。A系統では、兵衛佐一門の繁栄は、観音のご利益によるものであると、神仏の利益譚になっている。ところで、国会本の清水の観音とは、姫君の乳母の権の少将が祈願していた観音で、本文中にも、願掛けの箇所が見られる。

つまり、同様の趣旨が描かれていることから、慶応本・岩瀬本の観音もこの清水寺の観音をさす。なお、国会本では、長谷の観音が付け加えられている。兵部卿の宮が長谷寺に参籠し姫君の居場所の示現を受けたという記述がある（慶応本・岩瀬本では清水寺になっている）ので、この点を受けての記述である。そして、慶応本は、観音や悲増菩薩の名号を唱えることを勧める言葉で物語を終結させている。国会本では、『法華経』上巻の方便品の文句を引用し、かつ和歌を加えて、これもまた信仰を勧める言葉で物語が終結しており、両書とも中世的色彩を感じさせる。これに対して、岩瀬本は、人間の心のもち方の大切さを唱えるという教訓的な言葉によって物語が終結している。

また、継母播磨の三位の呼び方を比較してみると、
表2 継母播磨の三位の呼び方の相違

呼び方	慶応本	国会本	岩瀬本	京大本
播磨の三位の局	1	0	2	0
播磨の三位	13	22	7	26
三位	4	2	0	9
姫君の継母播磨の三位	1	0	0	0
継母播磨の三位	0	1	2	0

繼母	0	0	6	0
姫君の繼母	0	0	1	0
繼母御前	0	0	0	1
母播磨の三位	1	1	0	0
母	0	0	3	0
かれ	0	0	0	1
播磨	0	0	0	1

右のようになる。つまりこの比較表が示すように、岩瀬本は、他の諸本に比べて、繼母である播磨の三位を「繼母」と記すことが多く、特に姫君を主体とした場合はこの点が顕著である。つまり、人間関係を分かりやすく示そうとしている。岩瀬本は子女向けに書かれているのではなからうか。

六

最後に、この物語がなぜ多くの似通った異本を生んだのかを考察してみたい。そこで、物語の構図を考えるために、登場人物の関係を見ると、

京極大納言一侍従の内侍

兵部卿の宮

(兵部卿の宮の叔母—京大本)

古き帝の女式部卿の宮

兵衛佐

兵衛佐の妹の姫君

右大臣

四位の少将

帥の局

播磨の三位の局(帝の乳母)

という関係にあり、それぞれの妻に同様の子供を対比させている。そして、播磨の三位には現帝の権勢を背景にし、兵衛佐側は次期帝と目される兵部卿の宮の権勢を背景にして、右大臣家の相続問題を絡ませている。ただこの場合それぞれ庇護者である帝と兵部卿の宮の関係が諸本によって異なっており、慶応本・国会本は異腹の兄弟、京大本は同腹の兄弟、岩瀬本はこのことに関する記述はない。なお、同腹とした場合、後に兵部卿の宮が帝位につくという物語の流れに関しては自然である。しかし、善と悪という二者対立構造は弱くなる一方、播磨の三位の悪的要素は強まることになる。

また、継子に対する憎しみから虐待するという感情は他

の継子譚と異なりやや稀薄に思われる。故にこの物語は、家の相続問題の物語と見ると、それぞれの人物の位置や評価がしやすく、非常に分かり易い構造に組み立てられているといえる。そして、恋愛譚・継子譚・お家騒動譚の三つの要素を組み込んで描く中で、二組の血筋を対比させることにより、善悪の対立を理解しやすくしている。

なお、こういった人物を物語中で対比させていく描き方は、読者や編集者がどの人物に同情を持っていくかによって微妙な物語変化が現れてくるため、多くの同系統の異本を生んだのではないだろうか。

七

以上の結果から、岩瀬本「二本菊」が、兵衛佐の記述を排除することは、読者の目を妹君の方に向けさせる効果を導いているといえよう。また、妹君を主体にし、播磨の三位との関係を明かにしていることは、物語の流れを分かり易くするだけでなく、ひいては読者層を限定することとなり、子女に分かり易くとき聞かせると言った目的を持っていたためであろう。

なお、他の諸本の考察は、今後の課題にしたいと思う。最後になりましたが、貴重な御蔵書の閲覧を許可してい

ただき、かつご配慮していただいた岩瀬文庫の方々及び諸機関に心からお礼申し上げます。

注

- ① 樋口芳麻呂「王朝物語秀歌選上」(岩波書店 昭和62)に収録された「風葉和歌集」による。
- ② 中野莊次「風葉和歌集(上)」(国語国文「昭和8・2」、市古貞次「中世小説の研究」(東京大学出版会 昭和30)、松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語(続)」(斯道文庫論集「5」(昭和42)「中世小説―異本の問題について―」(文学語学「(昭和44)、西本寮子」「三村義人氏蔵残缺「ひともと菊」について」(広島女子大國文「5」(昭和63)、神野藤昭夫「散佚物語事典―鎌倉時代物語編―」(体系物語文学史第5巻「(有精堂 平成3)を参照。
- ③ 松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(御伽草子の世界「三省堂 昭和57)による。
- ④ 注2に記した松本隆信氏の論文による。
- ⑤ 内閣本はA系統の刊本寛文十一年版系統の本文である。
- ⑥ 花月文庫本は下の途中から欠落しているがA系統の刊本寛文十一年版系統の本文である。
- ⑦ 三村義人氏蔵本は西本寮子氏によればA系統の慶応本に近くそれよりまして斯道文庫本に近い系統の本文である。

- ⑧ 「大阪青山短期大学所蔵品図録」による。
⑨ このニューヨーク公立図書館本とパリ国立図書館本は、

『LE CHRYSANTHEME SOLITAIRE』の解題による。なおパリ国立図書館本は、上冊前半が欠落しているが、A系統に加えるべき本文である。

- ⑩ 半紙本は、A系統の刊本万治三年版系統の本文である。
⑪ 卷子本はB系統の京大本に近い系統の本文である。
⑫ 横本袋綴本は乱丁がみられるがA系統の斯道文庫本に近い系統の本文である。

- ⑬ 西尾市立図書館岩瀬文庫蔵奈良絵本「一本菊」による。
〔書誌〕

奈良絵本、上中下三冊。横本。鳥の子紙袋綴。丁数、上冊二十四丁、中冊三十一丁、下冊二十丁。行数、一面十四行。挿絵、二十(最初の絵は二面で一図と数える)。下冊に脱落がみられる。

詳しくは「室町物語集第三」の横山重氏の解題を参照されたし。

- ⑭ 「室町時代物語大成第十一」(角川書店 昭和58)に収載された慶応義塾大学図書館蔵「一もとときく」による。
⑮ 国立国会図書館蔵万治三年野田版「一本きく」による。
⑯ 「室町時代物語集第三」(井上書房 昭和39)に収載された京都大学図書館蔵「白きくのそうし」による。

- ⑰ 徳田和夫氏解説の「一本菊」『日本古典文学大辞典第五卷』(岩波書店 昭和59)による。なお、傍線部は「向って」という言葉になると思われる。

- ⑱ 「日本古典文学全集29平家物語」(小学館 昭和55)による。

- ⑲ 松本隆信「資料翻刻大洲市立図書館蔵「一もと菊のものがたり」」(慶大「芸文研究」28号)による。

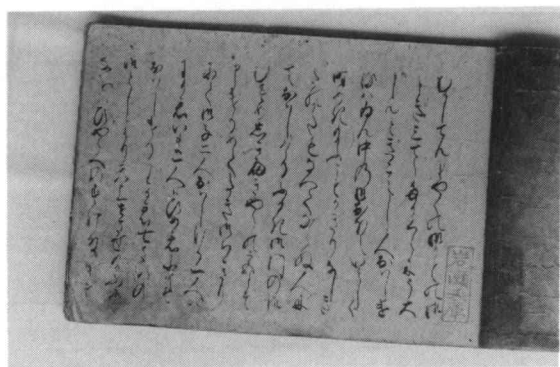
- ⑳ 天理図書館蔵写本「一もとときく」による。

- ㉑ 岩瀬文庫本のこの部分の脱落は、慶応本で一頁弱、国会本で一頁弱、京大本で一頁強にあたる。

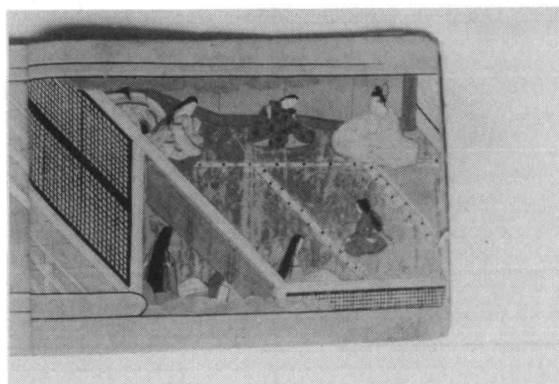
- ㉒ 「法華経上」(岩波書店 平成5) 128頁を参照。



岩瀬文庫 上冊 表紙



岩瀬文庫 上冊 第1丁表



岩瀬文庫 上冊 第2丁裏

（大学院博士後期課程三年）